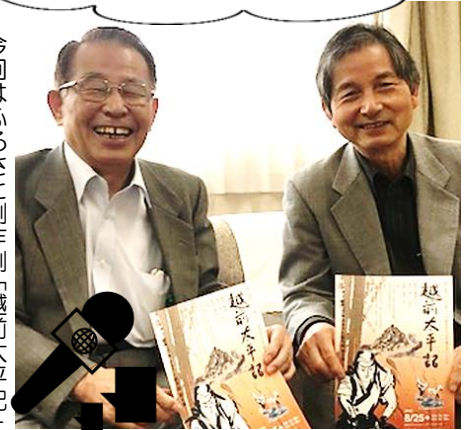


文化センターの「つぶやき」ならぬ「ぼやき」で文化センターへの旅を…

あなたに聞きたい!



墨崎洋典さん・道上春夫さん

今回お話を伺った創作劇「越前太平記」公演を目前に控えたシアターWATELIA(わた)の脚本家・墨崎洋典(脚本家としては墨崎洋介)さんと、演出家道上春夫(演出家としては神治生)さんにお話を伺いました。

文化センター(以下文)：今回で「ふるさと創作劇」としては第6弾になるんですね。毎回選ばれる素材がすごく素敵ですね。

墨崎洋典さん(以下墨)：素材選びは地元につながる歴史、それも知られていないものを敢えて探して公演の一年位前から演出の道上さんと相談してだんだん煮詰めていくやり方で最終的に第3、4校にも書き直して作っています。だから3年に1回しかできない。

道上春夫さん(以下道)：「ふるさと創作劇」というスタンスで生まれたのは、最初に墨崎さんの「打ち水」という小説があった、その小説をお芝居にしたいというのがきっかけで、もう十八年くらい前かな。

道：これなら大きな芝居が生まれる！と。それで、この小説を芝居にしたいんやと墨崎さんに提案したところ、「自分で脚本を書いてみたい」と。

墨：そんなこと言った？無理やり書かされたか。(笑)

道：いやいや(笑)「私が脚本でおこしてみる」と。それで脚本の書き方については私に連絡する、と。そこから生まれたんや。

それまでは文協(越前市文化協議会)の役員としての付き合いがなかった。墨崎さんは文芸部長で、私は芸能部の発表スタッフ。

墨：「打ち水」というのは地元で文芸誌に載せていて、そしたら思いがけず芝居にした。それが最初。

道：それが第1作で。当時(文化センター)キャバが千二百だったのが満席になった。墨：黒字はあれだけやな(笑)。もともと市民芸能祭で僕が脚本を書いて道上氏が演出をしていて。みんな一つのストーリーを作ってお客さんも沢山いてね。道：今も各団体の代表を知っているというのはそういうことを長いことやっていたからそのおかげ。今でも付き合ってくれる。文：それが余計いいですよ。市民のみんなで劇を作っているという。そして知らない歴史を少し知ることができる。題材はどちらかが探されるんですか？墨：だいたい二人で。二人で相談して。トマオニです(笑)。道：トマオニの店長が「次はどんな芝居ですか？」って聞きに来るんやって(笑)。文：お若い時から演劇は好きだったんですよね。道：僕は高校時代の演劇部からやめんとずっと。途中で止めたことがない。文：高校から始めたのは何かきっかけがあったんですか。道：中学一年生の時に骨髄炎になって。中学の半分は入院生活。中学3年生の時に大きな手術をしてなんとか治った。でも足が曲がらない。高校に入っても、それも夜間高校よ。その中で負けんぞ！と。それで体操クラブと演劇部に入った。片足で空中展開もできるようになった。演劇部では足が悪い先輩からまともな役はもらえず、それで頭にきていたんだけど、4年間演劇部を貫き通した。高校を卒業してから「ひまわり」という劇団に入ってから、次の年に「新芸」という劇団を先輩と立ち上げた。「新芸」は自分で立ち上げたけど、先輩がたくさん入ってきて、立ち上げた本人はどっこ吹く風になっちゃって。その後、僕は障がい者の施設に入って勉強させてもらって卒業したときに、「新芸」には戻らず別の劇団に誘われて。「新芸」の代表と別の劇団代表をしていた僕が話し合っって創作劇を合同でやったら、劇団を合併しようかという話になった。武生には6つも劇団があった

んで、細かい劇団が名前だけあってもあかんで合併しようと改革を進めてたんや。それで私はスタッフの充実を図って、今の「演劇工房」みちるるべ(道上さんが主宰する劇団)を作っていくベースがずっと続くんです。シアターWATELIAが生まれたのもそういう経過があったや。文：その話も面白そうですね。それ劇にしましょう(笑)。そしてご自身の劇場まで作られて。道：それまではつぶれた繊維工場を訪ね歩いてたんやけど。やつといもんになったと思っても引き揚げてくれと言われたら出てかなあかんようになる。それで、第1工房を作ったわけや。それが最初でいい小屋になって。それから三百人ほど入れる小屋が欲しいな、と。借金の上に借金を重ねて土地を買って。それで第2工房を作って。回り舞台もある。道：演劇の制作は全部墨崎さんがやっってる。補助金の申請から全部。彼がやってくれてるからこ成功してる。文：本当にお二人でちょうどいいバランス。墨：足りないところを補うというか、そういうコンビやわ。道：行き過ぎたり、不足はお互いに指摘する。「ほりやアカン！」と。で、ちくしよ！って思いながら(笑)。文：学生時代からずーっとお二人でされてたのかと思っていました。墨：いやいや僕は五十歳になってからやの。それまではずっと仕事に追われてたで、五十位になってから文学活動したいなと思っって、「ジトム」っていう文芸誌を発行している集まりに入っって。童話やら小説やら書いて発表して。それでその中の「打ち水」を道上さんがたまたま読んで「これを芝居にしようか」という話になって。文：それまで演劇には何も？墨：いや、全然。ただ観るのは好きやったわ。だけど脚本を書くのは「打ち水」が全初の最初やった。道：今回の「越前太平記」は墨崎さんの熱望の世界や(笑)これが私がやるんや！って、十年も前から言うんやって。そんなネタが良いとは思わんやけど(笑)。

千代鶴国安は誰もが知ってるかもしれないけど、南北朝時代を武生の戦いやって言ったつわからんもん。それをネタにせいつちゅうんやで弱ったなと(笑)。道：時代劇の中にパレエが出てきたり、お琴の演奏があったり、詩吟があったり…なんていう劇はあんまり見たことありやせん。篠田(洋)先生の音楽があるでしょ。(越前市文化センタージュニア合唱団)このとりも。そしてチラシのデザインは上田みゆきさん。上田さんはこの芝居にも出してもらってる。それから今庄の羽根曾踊りも協力してもらってる。墨：私らのWATELIAの特徴は「創作」っていうことね。創る楽しみが大きいような気がする。制作するのでも、リハーサル終って夜中まで反省会をするんやって。そうすると、ギリギリでも良いアイデアが出てくる時がある。道：追い込まれると人間って良いアイデアが出るんやの。それはアマチュアの特権やけど。プロの世界ではそんなこと許されんみんなの良いアイデアを全部吸収するのが僕の仕事。全部自分ひとりではできんやで。みんなのアイデアや。やっぱり集団で制作する作品の作り方っていうのがあって。墨：この「創作劇」っていう特徴でもあるし。楽しみでもあるの。既製の作品ではそれはないと思う。道：そういう意味でもバクチなんやの。うまくいくか、いかんか。墨：でもおかげさんで失敗作っていうのは今のところないな。道：無い。想像できるから。創造の仕事はやつたこと無い事を創り上げること。創造で、想像通りにいかんかどうかはバクチやけど、創造した事の可能性を大事に考えれば、失敗は少ない。リスクはそんなにない。墨：知らず知らずのうちに「だいたいこれはいけるな」と思っってやっってるんや。文：貴重なお話をありがとうございます！道：「越前太平記」楽しみにしています(笑)道：格好いいところだけ載せたい(笑)「越前太平記」楽しみです！乞うご期待！

話題の
シアターWATELA
公演はこちら!!

シアターWATELA ふるさと創作劇 第6弾

越前太平記

南北朝時代、刀鍛冶 千代鶴国安はなぜ鎌を作ったのか…

脚本：墨崎 洋典 演出：神 治生 音楽：篠田 洋

日時：2019年8月25日(日) 14:00開演 会場：大ホール

入場料：前売り 1,500円 当日 1,800円 学生 1,000円 (全席自由席)

第71回文化センター寄席 上方落語会

日時：2019年7月15日(月・祝) 14:00開演

会場：小ホール 出演：桂九雀、桂よね吉、桂二乗、桂りょうば

入場料：一般 1,500円 友の会 1,300円 大学生以下 500円 (全席自由席)



二〇一九年度(公社)全国公立文化施設協会主催 東コース 製作 松竹

松竹大歌舞伎

松本幸四郎改め二代目松本白鷺 襲名披露
市川染五郎改め十代目松本幸四郎

日時：2019年7月23日(火) 13:00～、17:30～ (2回公演)

会場：越前市文化センター 大ホール

入場料：一般 7,200円 友の会 6,700円 当日 7,700円



松本白鷺

松竹大歌舞伎制作発表が行われ、松本白鷺さん、松本幸四郎さんからコメントを頂きました!

公文協中央コースの巡業はとも皆さまに楽しんでいただきまして、各地で高麗屋の親子の襲名公演をご覧いただきました。今回の東コースも場所によっては一回限りのお目見えでございますので、全身全霊を込めて、一期一会の舞台を勤めてまいりたいと思っております。

『引窓』では、濡髪(長五郎)を演じます。昔は相撲も芝居も遊郭も繋がりがあり、現代とは少し違った非日常的な趣がございました。その趣を出しつつ、濡髪を演じたいと思っております。

松本幸四郎

父と共に歩むはじめの一步を多くの方にご覧いただきたいです。また、巡業公演は一日一日の公演でご当地の皆様にご舞舞伎に興味を持っていただくという重責を担っていると思っております。

今回の演目『引窓』はとても大好きな演目で、曾祖父である初代吉右衛門が演じたお役でもあり、襲名狂言として演らせていただくのは大変ありがたいと思っております。父の濡髪(長五郎)、そして自分の与兵衛と親子で演らせていただけることにも、とても幸せを感じております。

また、『かさね』は猿之助さんと勤めさせていただけます。彼との『かさね』がコンビと言われるように目指して頑張りたいと思っております。とても名曲ですし、与右衛門の冷たさが色気に繋がるような色悪を演じられればと思います。

いよいよ公演間近です!お楽しみに!

このとり日記

令和元年6月



一緒にうたおっさ〜♪

2019年6月1日(土)第5期生入団式がありました。入団式では、新入団員3名を迎え新生このとりとなりました!! まだまだ団員募集中です。練習は毎週土曜日午後1時30分~午後3時30分です。みんなでまってるよ~!

今年も8月4日(日)の合唱団「武生」サロンコンサートに出演させていただきます。今は本番に向けて練習中です。みなさんぜひ見に来てね!

ティータイムコンサートを開催しました!

6月27日(木)文化センター2階「キッチン ジョカトーレ」にて「ティータイムコンサート」を開催しました。

平野淳子さん(フルート)と飯田由美さん(キーボード)の素敵な演奏と、ジョカトーレさんの美味しいデザートセットをティータイムのひととき皆様にお楽しみいただきました。

今後もティータイムコンサートを企画予定です。皆様ぜひお待ちしております!



『喫茶去』(きっさこ)

永平寺七十六世 秦 慧玉 禅師 (1896~1985)

越前市文化センターの会議室 302号室には『喫茶去』が飾られています。「お茶でもどうぞ」の意味で、お茶席にも頻りに掛けられる禅の言葉です。

身分の違い、賢愚、老若男女を問わず、常に等しく接することの大切さを説いているとも言われますが、ここでは「ひとまずお茶でもどうぞ」とそのまま解釈し、忙しい日々の中でほっと息つく時間を、このブンボヤとお楽しみいただければと思います。

